

# 春燈

11月号

November 2012



主宰の句

安立公彦

新涼やひとすぢ残る蜘蛛の糸

邯鄲の終のすみかや古墳径

手浸せば眼澄みゆく秋の水

有りなしの風にも揺るる草の花

秋暑し医師わがやまひ棒読みに



久保田万太郎の句

# 返り花その日くの来ては去る

『春燈抄』昭和二十一年

いくら咲いても実らない返り花に、己を重ねている。今年は没後五十年。師はかつてこう述べておられる。春燈の色合とはいうところの「写生」に安住しきれないこれらの哀しみの壁でありよろこびの翳である……と。

明るさの中に翳があつてこそ奥行が出、次元も高まる。師は又、哀しみの奥には、必ず薄明かりが射しているという救いも我々にお示しになっている。

鷹崎由未子



久保田万太郎の句

いくつよりとしよりならむカンナ燃ゆ

「春燈」昭和三十四年

『』としよりの日』といふものあるらし」と前書がある。まさに誰もが抱く感慨であろう。「としより」に向けて意識は百様である。心中ではまだまだ仲間にはなれないと思っている年代もある。万太郎もちよつと離れてその手前に自分を置いているようだ。まだとしよりではないという姿勢がみえる。「カンナ燃ゆ」からその十分な気概がうかがえる。万太郎七十歳の作である。

宮崎裕子

# 燈下集



○ 割田容子

髪洗ひ危ふきこころ引き戻す  
待つといふひととき嬉し夜の秋  
利かん気は今もそのまま青蜜柑  
叶はない夢などはなし青蜜柑  
秋草の素朴さ生かす呂宋壺

○ 小泉貴弘

猿の腰掛立派に太り梅雨入かな  
大木のいのちみなぎる梅雨晴間  
醜の香ただようてぬる梅雨の蔵  
釜茹での蝦蛄食ふ瀬戸のあかね雲  
崖路や滝の裏より滝を見て

○ 戸辺信重

地下駅をあがり出づるや蟬集く  
蟬追うて見つむる瞳今の子も  
稽古着の少年少女蟬しぐれ  
行合の空夏つばめ帰りしか  
新涼や読みさしの本始めから

○ 林紀夫

街騒を抜け新たなる残暑かな  
さはやかや街案内の手話の指  
秋蟬の垣塙を抜くる下山かな  
新涼や川に落とせる蔵の影  
川筋に続く白壁良夜かな

○ 中野さき江

少年の夢は不確か草矢打つ

秋霖や衣桁に残る男の香

鳥かぶと切るわざはひを怖れけり

喪の帰り背にびつたりと西日の矢

胸中の悪を育てぬ西鶴忌

○ 成田なな女

琴の音のとぼそもれ来る夜の秋

しづかさや丈山苑のぼつたんこ

ヨットの帆ひらりひらりと蝶の如

袋菓子山と積まるる地藏盆

かなかなに鳴かれて急ぐ峠かな

○ 栗原完爾

陸橋の中央わたる残暑かな

池底にしづむ倒木草は実にな

一つ拾ひ一つ蹴飛ばす木の実かな

露草や浜の道すぐ行き止まる

飛行船のまた戻りくる鯨の秋

○ 松本俊介

白砂庭音吸ひ尽くす残暑かな

秋の田や雪崩るる先の潮の色

夏瘦や父祖の名残る力石

鮎せせる祖母のしつけの箸使ひ

注連縄のしとどの濡れや竜淵に

○ 堀内五齡

車椅子日傘の陰を抜けたがる

病棟のしじま深むる蟬時雨

雲の峰に真向かふ試歩の一步かな

車椅子を伴侶と定め涼しけれ

蟬噪の不意に止みたる原爆忌

○ 小菅礼子

散りもせず老いも知らずや百日紅

糸蜻蛉新体操のおはこ見す

ふり返る父母の世わが世つくつくし

みんなの遠のく日なり夕散歩

夕さびし端居のおとも金平糖

# 当月集

安立 公彦選



○ 藤原若菜

明易や古事記の神の人臭き

街なかに遺る富士塚夏木立

新涼や罌あをあをと稿重ね

秋の蠅電車の床を歩きをり

ふたり目も嫁いでゆきぬ鱚雲

○ 篠原幸子

おだやかに夢に來し母今朝の秋

多羅葉にしるす想ひや星祭

施餓鬼会や散華一片授かりぬ

ひらく手の放つ迷ひや盆踊

新涼やさらりと無事を告ぐる文

○ 齋藤晴夫

新秋の月の曆を繰りにけり

涼新た寛の水に耳藉して

月の出の銀の光背土用富士

星涼し風の磨ける山上湖

八朔や風の移るひ川面より

○ 西岡啓子

遠花火遅き夕餉となりにけり

新涼や手摺あらたに位牌堂

空のぼる一筋の雲休暇果つ

新生姜夕餉を知らず声大き

うべなふべき別れありけり鱚雲

○ 川崎真樹子

日記帳の余白八月十五日

鈍の包丁嗤ふ南瓜かな

威銃真つ先に人驚かせ

上顎につく鰻頭の皮癩祭忌

月天心沈没船の羅針盤

# 春燈の句

安立 公彦選

客ひとりふたり三人八月尽

枝豆やよくぞ続きし小商ひ

家事終へて眠り補ふ虫の昼

校庭の木の下で会ふ天高し

島沿ひに頭いくつも遠泳す

朝焼の沖広げゆくフェリーかな

向日葵ののつぺらほうの顔に雨

熊蟬や墓標はなべて山を背に

畳屋の担ぎ行く背に秋の風

今朝の秋振り向きざまに仔山羊鳴く

蛸や木立の間より沼の照り

露草の朝日届かぬ青さかな

昼寝子にタオルケットの海広し

冷し酒孤愁たのしむ齡かな

東京 坂本依誌子

三重 上野 進

千葉 吉村さよ子

神奈川 浅木ノエ

八月や待つ人のある旅鞆

秋の噴水乱調の日の斑かな

仏事あり辿る家紋の桐の花

歳重ね泣くを忘れし端居かな

夕端居帰らぬ人と知りつつも

八十の齡数ふる朝の露

露の玉歪みしままに葉より落つ

ゆるやかな麒麟の歩み桐一葉

墓洗ふ注ぎし水は桶二つ

休校の尊徳像に秋日濃し

秋暁の大地の湿り普羅忌かな

父に供ふ盆灯籠のみづあさぎ

膝小僧揃へ聞きにし敗戦日

男手のしみじみ欲しき厄日かな

福島 森谷達三

神奈川 松田千枝

千葉 中村紀美子



# 余言

安立公彦

被爆の日々のこと、作者は子供ころにそういう歴史の大きな転換を体験したのである。

終戦の日私は国民学校六年生だった。大人の心労の全てを押し量ることなど不可能だったが、敗戦ということの意味とその悲惨さは理解出来た。しかし敗戦に伴う現実、個人の置かれた立場により大きく変わる。

この句、視覚的な明暗を述べただけだが、「四隅の翳る」に籠めた作者の思いは十分に理解出来る。

文房四宝机に正し今朝の秋

佐藤 信子

形正しい句だ。「文房四宝」とは筆、紙、硯、墨の称。墨書の全てである。今作者はそれらの文具を机上に正し、執筆に入ろうとしている。かねて作者は写経に勤んでおられる。この執筆も写経なのかも知れない。

ものを書くと言うことに段階はない。しかし文筆に親しむことは、例えばわが身を正すことでもある。写経はその最たるものと言えよう。この句、「今朝の秋」が、上五中七とよく調和して二句の格調を高めている。

青空の四隅の翳る終戦日

西谷良樹

この「四隅」は、物理的な謂ではない。作者の心境を描く青空の翳りである。かの終戦の日のこと、さらに終戦に至る

全山にとどろく男滝女滝かな

萩原 すみ

深山幽谷に轟く滝の音。しかもその滝は男滝女滝の対をなすもの。滝は古くから信仰の対象とされ、また人格化されて来た。那智の滝などはその一例である。

この句、一読勇壮な気分が打たれる。その基は「とどろく」だが、それを支える「全山」、「男滝女滝」と相俟って、一句に壯者の精力を与えている。作者は現在九十五歳と聞く。長寿の国にあつてなお高齢と言えよう。今後の更なる健康を願うばかりである。

虫の音に夜の固さのほぐれけり

高橋 和女

この句の要点は「夜の固さ」にある。例年の繰り言ながら今年の夏は暑かった。九月に入り、八朔が過ぎ白露が過ぎて

も厳しい残暑は治まらない。その残暑はさながら身辺の「物」に及び「夜」に及び。作者はそれを「夜の固さ」と表現した。的確な把握である。

その夜ごとの残暑の固さが、ある晩庭前に鳴く虫の音によりほぐれていったと言う。巡り来る季節の有り様をめぐりに表した一句である。

新涼や零れし画鋏押し直し

柴崎甲武信

壁に止めていた画鋏がはずみで落ちるといふことは良くあること。それを拾って押し直したという。日常の此事である。此事をつまらないこととして、そのままに過ぎるのが一般だ。しかし作者は、「零れし画鋏押し直し」を俳句という詩に昇華させた。その起点が「新涼」である。

此事は日常くり返される。しかし此事にこそ作句のこころは宿る。但し此事を俳句として昇華させるには、平常心を失わないことが大切である。優れた作品だ。

ひとすぢの星流れけり藤村忌

古澤恵美子

「藤村忌」を詠んだ句は余り見ない。昭和五十六年刊行の『日本大歳時記』（秋季号）には、十六名の近現代俳人作家が登場するが、藤村忌はない。俳人以外では、国男、義秀、道空、紅葉の四人のみ。この四人の中に、藤村に代わるべき文人はいないのか、という素朴な疑問も湧く。

昭和五十二年刊行の『最新俳句歳時記』（文春文庫）、平成十八年刊行の『角川俳句大歳時記』の各秋季号には、共に藤村忌は出ている。日本の近代詩、近代文学の礎を築いた作家である。「藤村忌」はもつと詠まれていい。

この句、「ひとすぢの星流れけり」が島崎藤村とよく合う。作者もまた藤村の愛読者なのだ。昭和十八年八月二十二日没。七十一歳。今年は没後六十九年目に当たる。

さはやかや街案内の手話の指

林 紀夫

最近「はとバス」などでの都心の観光案内が流行っている。しかしこの句の特異性は「手話」にある。或いは聴覚の不由な人の為の観光ガイドか。

この句、「さはやかや」が良く効いている。若い健康的な女性のガイドだろう。「手話の指」がひときわ清潔で生き生きと感じられる。まさに現代俳句だ。

近いうちいいえまだまだ生身魂

石田 康明

会話体の文章は良くあるが、会話体俳句は珍しい。登場するのは作者に擬した生身魂と、その祖霊。

もうそろそろこちらにおいてでないか、と祖霊。いいえまだまだ、と生身魂。上五下七の間答が上質のユーモアとなつて何とも愉しい。しかも表現には意を尽くしている。この句もまさに現代俳句だ。